

古い喫茶店。分煙すらする気のない、昔ながらのその店に朝倉律はいた。

「お金が……必要なんです……」

お願いします！ と頭を下げる。もう長いこと切っていない前髪がはらりとテーブルに触れた。ツンとしたタバコの臭いが鼻を突く。どうやらもうこのテーブルには臭いが染みついてしまっているらしい。

「おいからですか」

「っ！ たくさん、です……」

一筋の希望が見えたような気がした。いや、でも期待してはいけない。今まで何度も期待は裏切られてきた。期待なんてしない方がいい。本当は人間なんて信じるべきじゃない。でも、今は誰かに縋る他ない。

（待ってて智樹……お兄ちゃん頑張るからね）

それでも、話を聞いてもらえたことすらほとんどないのだ。質問を返してもらえるだけで見込みありかと思ってしまうのは仕方ないことだろう。

「……話は聞いています。大変なんですわね」

「あ……」

はい、と答えてもいいのだろうか。もし雇ってもらえるのなら、これは面接だ。

「私のところで働くのはつらいですよ」

「覚悟しています」

もう、何でもよかった。とにかく短時間でたくさん稼げる仕事なら。

母親が死んで一年。残された智樹と二人の生活はハードだった。それでもなくても智樹は生まれつき身体が弱く、一人で育ててくれていた母親は入院費のために働き詰めだった。それでも有事のためにと残しておいてくれたお金で一年は生活することができたけれど、貯金はもうすぐ底をついてしまう。でもこの一年のようにコンビニバイトをするだけでは家のことと入院を繰り返す智樹の世話との両立は厳しい。智樹のそばにいたためには、高額時給のバイトで稼がなくてはならない。それならもう――法に反していてもかまわなかった。

「……手術が必要になります」

「え？」

手術。治験のようなものだろうか。

この男、藤永を紹介してくれたのは智樹と同じ病室に入院している沢木祐介の兄、昇だ。沢木兄弟も親がなく、昇は働きながら祐介の世話をしていた。同じような境遇に、昇と意気投合するのは早かった。そして恥ずかしながら金の相談をしたとき、昇の恋人がこの男、藤永篤を紹介してくれたのだ。

「はい、手術です」

藤永がちら、と店内を確認した。けれどこの喫茶店には他に客は一人もいない。それにマスターは仕事をしないのが本来の業務であるかのように昼ドラに観入っている。

「手術をして、一年は療養が必要です。その間も給与は支給されますが、恐らく身体の痛みで弟さんの元へ通うのは困難になるでしょう」

「あ……」

ダメ、ということか。律には智樹のところに行かないという選択肢は一切ない。

(また探さなきゃ……)

昇の恋人の紹介ということで、律が智樹のところへ通わなければならないことを知った上での紹介かと思っていた。自然と肩が落ち、溜息のような息が漏れる。

「ですが手術を必要としない場合もあります」

「えっ?!」

「しかし、その場合給与額がガクンと落ちます。手術をした場合の給与は週に三日、二年働くだけで生涯暮らせるほどの収入を得ることができますが」

(うそ……)

それならそうしたい。そしたら休日は全て智樹のところに行つてやることができる。けれど術後に行けなくなるのなら――。

「手術をしない場合、五年は働く必要があるでしょう」

「え……」

それは、五年働けば生涯分の賃金を得られるということだろうか。

「しかし、ハードですよ」

「いえ、かまいません」

稼げるのなら、何でもいい。一時は臓器を買ってもらおうとヤクザの事務所まで探したくらいなのだ。金が手に入って、困った人の元に渡るのならばいらぬ臓器くらいくれてやる。そう思っていた。

「……分かりました。ではまずは職場見学に参りましょうか」

藤永がそう言って立ち上がる。でも見学なんて必要ない。どんな仕事でもかまわない。一先ず智樹が手術さえ受けられれば。智樹が一人で生活できるようになるまで回復できれば――手術を受けることさえできればほとんど普通の人と同じような生活ができるようになる。聞いてるので、智樹が自分で生活できるようにさえなれば、それで自分はどう死んでもかまわない。だから臓器でも、今すぐでなければ生死に関わるような仕事でもかまわない。

「あのっ……いいんです。すぐに働かせてほしいんです」

立ち上がり、伝票を手にした藤永に頭を下げる。とにかく一刻でも早く仕事をしたい。そして一刻も早く弟に手術を受けさせてやりたい。

「……いえ、仕事を選ぶためにも一度見ていただく必要がありますので」

それなら仕方ない、と肩から力を抜く。藤永もそれを見たのかレジに向かった。

「……あの……」

本来なら払うと言うべきだ。けれど今は一円でも惜しい。

「いいんです。お気になさらず」

「……すみません」

頭を下げることはできない。でも今はプライドだってなんだって捨ててやる。智樹が第一。それはずつと変わらない。

「いえいえ。では行きましょう」

藤永に続いてドアに向かう。ちらりと振り返ると、店主はすでにテレビに夢中になっていた。

「どうぞ」

「失礼します」

藤永の車。有名な高級車。セダン。開けてもらった助手席に座りシートベルトをして藤永を待つ。

「気を楽にしてください」

「……ありがとうございます」

運転席に座った藤永は、車を発進させるとすぐに説明を始めてくれた。

「いきなり見ても驚いてしまうでしょうから」

「どういったお仕事なんでしょうか」

「博物館の展示品です」

「展示品……」

の、掃除とか移動とかそういう仕事だろうか——そう思ったけれど、藤永の言葉の先は全く別の仕事を示していた。

「はい。朝倉さんには展示品になっていただきます」

「え……？ 僕が、ですか」

綺麗な身体はしていない。汚いというわけではないけれど、ただ普通の身体だ。いや、普通より小柄。節約のためにあまり食べなかったせいか成長できなかったのだ。当然今も、どちらかと言えばガリガリ。しかも髪ももうずっと切っていないし、切ったとしても風呂場でざくざく切る程度だ。顔はまあ、学生時代は何度か告白をされたことはあるけれど、とてもじゃないがデートにお金を使うような余裕はなかったので丁重にお断りしていた。

「特殊な博物館です。人体改造博物館、というんですが」

「人体……改造……」

そんな博物館聞いたことがない。いや、でも昇の紹介だからきっと大丈夫だ。それに藤永も怖い人には見えないし、強引な雰囲気もない。

「はい。ですので手術が必要だと申し上げたんです」

「……でも、手術しなくてもいいものもあるんですよ？」

不思議なもので、人体改造博物館なんて不穏な名前を聞いても帰りたとは思えなかった。それが金への欲故なのかそれとも——他の何かなのかは分からないけれど。

「はい。ただ体験展示なので……あ、着きますよ。ここです」

車は地下駐車場に入った。あまりよく見ていなかったけれど、外観は普通のオフィスのビルのように見えた。こんなところに博物館があるのだろうか。

「ここは一般のお客さんが入るような博物館ではありませんから」

もしかしたら面接を受ける人は皆同じような質問をするのかもしれない。藤永は、まだ訊いてもいないというのに答えてくれた。

「こちらです」

地下駐車場ののに、どうやらまだ下がるらしい。エレベーターが止まったのは、地下数階は下がっただろうな、と思った頃だった。

「どうぞ」

開けられたドア。中に入るとそこは綺麗なのに――異空間だった。

「当館のパンフレットです。順番に見て回りましょう」

「は、はい……ありがとうございます」

そこはかなり広い部屋だった。博物館には行ったことがないけれど、ライトの当て方や説明板の置かれ方が博物館らしさを醸し出している。

「こちらへ」

「あ、はい」

藤永について行きながら渡されたパンフレットに視線を落とす。表は説明、裏は館内マップになっている。今いるのはマップの真ん中、下の部分。どうやらそこからぐるりと時計回りに回るらしい。

「まずは展示コーナーです。手前から順に亀頭のみ、亀頭なし……ざっと見て歩きましょうか。展示コーナーは全員手術が必要になりますので、朝倉さんは該当しないでしょう」

「あ……はい……」

壁面に並ぶ人間の足。全てが下半身しか見えなくて、大きく足を開いていた。まるで昔テレビで観た、女の人の出産シーンのよう。足置きの上に足を置いて、陰部を丸見えにさせている。

「わ……すごい……」

「ご興味がおありですか」

「あ……」

つい足を止めてしまった。だって足の間にあった陰部は皆普通の陰部ではなかったから。

「あ……これは全て男性……ですか」

「ああ、そこから説明が必要でしたね。大変失礼致しました。当館はスタッフもお客様も全て男性のみとなっております。ですのでこちらの展示品も皆、人間で言うところの男性となっております」

(展示品……)

今藤永が指し示したのは壁面に並ぶ下半身だ。けれどどう見ても女性の身体としか思えないものがあった。

「あの、こちらの方は？」

「こちらの方、ではございません。こちらのものは全て『展示品』でございます」

「あ……すみません。この展示品は女性では……？」

並びの最後にはどうしても女性にしか見えな下半身があった。

「いえ、この展示品も元々は男性の身体をしておりました。そこを手術で女性器に変えたのがこちらです」

「女性器に……」

「ご興味がおありでしたらお触りいただくことも可能です。穴に指を入れてごらんになれますか」

「いっ、いえっ」

だって女性器になんて触れたことがない。触るなんて言ってもどうしたらいいのかなんて分からない。

「では後程気が変わりましたら」

「は、はいっ」

女性器に触れる——どころか、他人の性器に触れたことがないのだ。緊張するし、怪我をさせてしまつたらと思うとやはり怖い。

「ではこちらへどうぞ。次は体験型展示品です。こちらは手術不要なものもございますのでゆっくりご覧ください」

ついて行った先にあつた巨大な箱。けれど、丸い穴からは人間のアナルが覗いていた。

「これは……」

「こちらは『アナルジュース』です。アナルの中でフルーツジュースをお作りいただくことが可能です。アナルジュースと、あちらの『尿道責め』は手術不要ですので身体が慣れさえすればすぐに勤務が可能です」

「アナルジュース……」

お尻の中でジュースを作る——それは……ちょっとあまりにも想像がつかなかった。でも手術不要ですぐに働ける、というのがすごく魅力的で、やるならこれだな、と内容も知らないまま心に決める。

「宜しければ一度お試しください」

「はい。ありがとうございます」

自分がやる側になるかもしれない——いや、自分はきっとこれになる。ジュースの作り方すら知らないくせに、脳内には自分が箱に入った状態が想像できた。真っ暗な箱の中、アナルに当たる風を意識して過ごす時間。でもきつと、耐えられる。幸い閉所や暗所に恐怖心はないし、箱の中にいる間、ずっと智樹のことを考えていられる。手術の内容とか、その後の生活とか、智樹の将来のこととか。

(大丈夫……頑張るから)

「ではこちらをどうぞ」

「これは……」

渡されたのは三角の器具。ステンレスだろうか。

「肛門鏡といいます。この先の方からアナルに入れて、このつまみを回すことでアナルを開くことができます。そうしましたら中にお好きなフルーツを入れてください」

藤永が視線で示した先には色とりどりのフルーツが並んでいた。丁寧に皮も剥かれ、どうやら種も取られているらしい。

「どうぞ」

「あ……ありがとうございます」

初めて間近で見るアナルはとても綺麗な色をしていた。ピンク色で、柔らかそう。とても排泄する場所には見えない。それになんだかどろっとしたもので濡れている。

「あの、この濡れているのは何ですか」

「ローションです。舐めても問題のないローションですのでご安心ください。展示品が壊れないように使っております」

「あ……そうなんですわね」

ローション。言葉は聞いたことがあるけれど見るのは初めてだ。そつと肛門鏡をアナルに押し当てる。

「わ……」

そこは抵抗もなく飲み込んだ。

「大丈夫です、そのまま押し込んでください」

「は、はい……」

でも痛くないのだろうか。それにこんな冷たそうだ。でもアナルはひくひくと動いているようにも見える。

「奥まで入れてください」

「……はい」

持ち手部分を握る手に力を込める。藤永はこのアナルを本当の物のように扱うけれど、やはり人だ。冷たいものは冷たいし、痛いものは痛い。痛いのも苦しいのも怖いのも、少ない方がいい。

「……入りました」

ゆっくり進めたつもりだったけれど、どうやら想像以上に柔らかいらしいそこは簡単に根元まで飲み込んでしまった。そして藤永に言われた通り、ゆっくりとつまみを回していく。

「あ……すごい……」

つまみを回すにつれてアナルがゆっくりと開いていく。くば、と開いたときに糸を引いたのはローションだろう。

(すごい……えっちな……)

先程まではピンクに見えていたアナル。なのに皺が伸びるとそこは真っ赤に色を変えた。

~~~~~

案内された部屋は六畳ほどの部屋だった。真ん中には足置きのついた椅子が一脚。足置きだとすぐに分かったのは展示コーナーに展示されていた『亀頭のみ』たちの下半身を支えていたものと酷似していたからだ。

そしてその前に設置されたカメラ。カメラの奥の壁は一面が鏡となっていて、戸惑う自分の顔がしっかりと見て取れる。

(マジックミラー……だろうな……)

でなければミラーに向かって足を開く必要はないだろう。

「では全て脱いでください」

「……はこ」

緊張する。あのマジックミラーの奥はどうなっているのだろう。何人ががいて、律の適正を見極めているのだろうか。

「脱いだらこちらに座ってください」

「はこ……」

恥ずかしい。それにすごく緊張する。まるで面接だ。でも面接よりも緊張するかもしれない。幸いなのは、急に来た緊張感でペニスが落ち着いたことだろうか。

シャツを脱ぐと、藤永が籠をこちらに向けてくれた。脱いだものを入れろということだろう。会釈をして受け取ろうとすると、首を振られた。

「どうぞ。持っていますのでお気になさらず」

「すみません」

持たせたままにするわけにはいかない。羞恥心を押し殺し、大急ぎで服を脱いでいく。

「……し、失礼します……」

マジックミラーの奥も、カメラも気になる。レンズの向きは完全に椅子の中心だった。

股間を手で隠し椅子に座る。そして足を上げ目を瞑って手を退けた。

「はい。では始めましょう。そのままお答えください。顔は正面、カメラの方を向いたままで結構です」すぐ隣に藤永が立った。一度だけ隣を見上げ、返事してからカメラに向き直る。

「ああ、手はこちらの肘置きに置いてください。ペニスは隠さないようにお願いします」

「はー」

顔が熱い。きつと真っ赤に染め上がっていることだろう。だってこんな、誰が見ているかも分からない場所で全裸になって陰部をはっきりと曝している。

「では、まず、セックスのご経験は？」

「……ありません」

「恋愛対象の性別は？」

「あ……あの、まだ誰のことも好きになっただことがないんです」

だから恋愛対象が女性なのか男性なのかは分からない。しかしここで男性同士が恋人となって働くとしても嫌悪感どころか違和感さえ覚えなかったので、きつと男性を好きになることもできるということだろう。

「誰も……ですか？」

驚いた声。初めて藤永の戸惑った声を聞いた。

「すみません……」

でも仕方なかったのだ。幼い頃は友達と遊ぶのが楽しかったし、それに弟のことがあった。高学年になると仕事で不在がちな母親の代わりに家事をする必要があったので友達と遊ぶ時間もなく、中学に上がった後も同じ理由で部活もやっていなかった。

「初々しいですね。ではその分オナニーには慣れているでしょう。してみせてください」

「あ……は、はい……」

確かにオナニーの経験はあるが、それほど豊富ではない。それに今はひどく緊張してしまっている。

(でもしないと……面談だし……仕事……!)

そつと手を伸ばし、萎えたままのペニスを握る。しゅ、しゅと動かしてみるけれど、なかなか勃起はできな

「大丈夫、ゆっくりでいいですよ。目を閉じてかまいません。もしくは自分の恥ずかしいところを撮影

されていると思いながらするとか……あとはそうですね、さっきのユーザーを思い出してみましようか」  
「あ……」

ユーザー。その一言でペニスが動いた。それに気付いた藤永が微かに笑う。

「素直なペニスですね。ユーザーが気に入りましたか」

「あ……」

藤永は優しい。興奮に導こうとしてくれているのがよく分かった。でも面談なのだから答えなくては。

「は、はい……お尻を使ってもらうのドキドキしました……」

もうペニスは完全に起ち上がっていた。しゅ、しゅとリズムカルにペニスを擦る。が、なかなか射精には至らない。

『オナニー、苦手?』

「えっ?」

突然聞こえた声。でもどうやらマイク越しに話しているような声だった。

『あ、驚かせてごめんね。下手なオナニーが可愛くてつい』

「……ダメですよ。彼は彼なりに頑張って射精を見てもらおうと思っっているんですから」

「あ……」

守ってくれた——それが嬉しい。でも藤永の言った「射精を見てもらおうと思っっている」という言葉が引くかかる。別に自分の意思ではないのに——そのように言われてしまうと興奮する。まるで露出狂になつたような気分。

『でもあんまりオナニーに慣れてないのかなって。恋愛経験もセックスの経験もないけれど、抜いてもらうのは経験があるのかな』

「な、ないです……自分でしか……」

「そうなんですか?」

またも驚いたような藤永の声。もしかして藤永もマイクの声と同じように思っっていたのだろうか。

「あの……僕あまりむずむずしなくて……だからオナニーの経験もそれほど多くなくて……あ」

言ってしまった後にはつとずする。こんな博物館なのだから、いやらしくて感じやすい人じゃないと雇ってもらえないのかもしれない。

「あ、あのっ……でも、その、気持ちいいことは好きです」

必死に搾り出した言葉だった。でも少なくとも大人の藤永にはお見通しだったのだろう。

「大丈夫ですよ。オナニーが下手だから不採用ということにはなりません。むしろ可愛いから好みだという黒服の方が多いでしょう」

「あ……」

本当だろうか。優しいから気休めを言っただけなのでは——でも、その優しさに救われた。

『うん、藤永の言う通りだよ。大丈夫。オナニーも上手にできないなんて可愛いよ』

「あ……」

またピクンとペニスが跳ねた。思わず下を見ると、いつの間にか先端が濡れていた。さっきは抜いても濡れなかったのに。

『いやらしいね。オナニーが下手って言われて感じちゃうのかな。えっちだね』

「あ……………」

浮かぶのは展示品になった後のことだ。きつとさっきのアナルジューサーも普段の仕事ではこんな風にアナルの感想を言われたりしているのだろう。それをただ聞きながら時間を過ごす。

『おちんちん、射精したい？ それともこのまま我慢する？』

「あ……………」

どうしよう。どうしたらいいのだろうか。そう言えば射精するようにと言われただろうか。オナニーをしてみせるとは言われた覚えがあるけれど。

「あの……………」

どうしよう。今なら……………この人がいやらしいことを言ってくれたら射精できるような気がするけれど、でもそれでは指示された『オナニー』ではなくなってしまふ。

『アナル、見せてくれる？』

「あ……………」

「……………足を下ろしてください」

「は、はいっ」

藤永に言われた通り足を下ろす。するとゆっくりと背もたれが倒れていった。そしてすぐにフラットになる。

「四つん這いになって、顔を下げてお尻を上げてください。カメラにしっかりと映るように」

「はい……………」

恥ずかしい。でも、見られたい。だってアナルを見られるなんてさっきのジューサーとおんなじだ。

~~~~~

「展示する場所か……………」

「はい……………そろそろ決めておかないと、と思って」

飯田と一緒に過ごす時間が増えても全く変わらない優しい人のままだった。いや、でもテンションは落ちただろう。きつとこれが普通の飯田で、出会った時はわざとテンションを上げてくれていたのだ。

「お洋服脱ごうか」

「……………はい……………」

好きだ、というのは律から伝えた。同棲前、引越しの準備をしながら毎日電話やメールで連絡を取った。そのときだって電話代が掛かるからと飯田から掛けてくれて、それでまたキョンとして。

今は入院中とは言え、家には智樹の荷物や母親の遺品もたくさん残っていたのでなかなか荷造りが終わらなくて、結局同棲が始まったのは知り合ってから一か月が経った頃だった。事前に藤永から聞いていた期間よりも遅くなってしまったけれど、飯田は文句を言うどころか荷造りを手伝いに来てくれたりして。毎日が楽しくてしかたなかった。

その間、飯田は惜しみなく愛情も注いでくれていたけれど好きだとは言われなかった。でもきっとそれもまた飯田の優しさなのだと思うて、それで律から告白した。そのときの飯田の嬉しそうな顔。気持ちを確かめあつてすぐに唇が寄せられたのは、きっと飯田もずっと我慢してくれていたからだ、と思つていて。それから始まつた同棲生活。

「……見て……ください……」

恋人関係になつて今日で二週間。まだセックスはしていないけれどキスは飽きるほどしてもらつたし、同棲し始めてからの一週間は毎日お風呂も入れてもらつている。だから裸を見られるのには慣れてきているのだけれど、こうして明るい日差しの中で自分一人が全裸になり、見てくれるようにと両腕を脇につけてお願いをするというのはどうしたつて恥ずかしい。

「うん、可愛い。……手術、どうしようか」

飯田は裸を見ながらも真剣に身体を考えてくれていた。律の一番が智樹であることも知つていて、同棲を始めてからも病院に送り迎えをしてきている。

「病院は週に三日のままだよ」

「はい……」

我儘だろうか。でも、どうしてもそれは変えられない。智樹だつて思春期だしあまり行つてもうざつたいだろうかと思うものの洗濯もあるし、医師との話もある。それにずっと病室で過ごすのも寂しいだろうし。

「じゃあもし手術するにしても入院なしか、あつても一泊くらいだね」

「はー」

藤永と話しているときは手術はなしという方向だつた。けれどやはり手術をした方が給与は高いらしい。そう思うとどうしても気持ちはそちらへ傾いてしまう。

「……おちんちんを切つたら一泊どころじゃ済まされないし……」

言いながら飯田が。ニスをそつと擲つた。

「あー」

「こんな感度のいいおちんちん、切っちゃつたらもつたないしね」

「やあ……」

セックスはまだ。けれど、射精は毎日させてもらつている。元々淡泊だったのに、「下手な律の代わりに」オナニーとして飯田は手を貸してくれていた。

『おはよう。あ、可愛いおちんちん、頑張つて勃起してるね』

『あつ……や、これはっ……』

同じ男なんだからただの生理現象だと分かるだろうに。引越し翌日の朝、寝起きすぐに「引越して筋肉痛になつていないか」と寝転んだまま全身を撫でられてバレた勃起。それから毎朝、朝起ちの確認をされるようになってしまった。

『おちんちん、射精したいって言つてない？』

『あつ……』

言つてなかった。けれど、飯田に触られたせいでそういう気分になつてしまつている。

『しゃ……射精……』

『じゃあオナニーしてみようか』

『えっ……』

してくれる、というか、セックスをするという流れではないのだろうか。

『オナニーの練習。律はオナニーがまだ上手にできないから、俺の手を貸してあげる』

『えっ？』

『おちんちん握ってあげるから、俺の手を動かしてごらん』

そんないやらしい提案から始まったオナニーの練習。けれどやはり飯田はどこまでも優しく、いやらしい水音が聞こえるようになったら自ら手を動かして射精させてくれる。それは自分でするよりも数倍気持ちいい。

『あっ、あっ……』

『可愛い声。オナニーのはずだったのにたくさん声出ちゃうね』

『やあっ……』

飯田が恥ずかしいことをたくさん言うせいで、以前から早かった射精はもっと早く訪れるようになってしまった。でもそれが、嫌じゃない。だって射精の後、飯田はペニスを清めながら褒めてくれるから。

『おちんちん、やっど気持ち良くしてもらえようになっで良かったね』

そう言っで萎えて皮の中に隠れた亀頭にキスをしてくれるのだ。その瞬間が一番好き。

(おちんちん切ったらそれもしてもらえなくなっちゃう……)

やはりそれは絶対に嫌だ。飯田に触れてもらえなくなるのも「そろそろオナニー上手にできるようになったかな」と確認のように訊かれるのも。全部好き。だから全部そのままがいい。

「タマなら弄ってもいいかな……」

「え……？」

「この中にローターを入れるんだよ。スイッチを入れるとタマが内部からブルブル震える。刺激されて精液も増えるし、律は射精が大好きだから嬉しいと思うよ」

「あ……」

陰囊が震えるなんて。それはどんな感覚なのだろう。

「切っで、中に入れるだけだから大きな手術にはならないし。睾丸摘出だっで一泊程度なんだから、大丈夫」

「……麻斗さんは、僕のタマタマが震えるの見たいですか？」

飯田が見たいと言っうのなら。だっで智樹のところへ通える内容ならもう、何でもいい。

「……うん、見たい。きつとってもいやらしいと思う。知らないお客さんにタマタマたくさんブルブルさせてもらっで、たくさんたくさん精液を作っで、それで帰っできたらたくさん射精しよう。知らない人を作っでもらっでた精液、俺が全部搾っであげる」

「あ……」

たまに見せる飯田の熱い目。嫉妬だ、とすぐに分かる。一緒に買い物に行ったときでも、レジが男性だったりすると飯田はこんな目で律を見る。言葉にはしない。でも視線で怒りを伝えてくるのだ。それが嬉

しい。

「ん……麻斗さんが搾ってくれるなら……」

お客さんに弄られない展示品なんてない。でも少なくともボタン一つなら直接手で触られたり、お客さんの精液や尿を飲む展示品よりはマシだろう。

「可愛い……じゃあ仕事が終わって帰宅したら、お客さんに増やしてもらった精液搾ってっちゃんとおねだりできる？」

「ん……します。僕の精液空っぽにしてくださいって……」

「っ……」

ペニスが痛い。それに飯田の視線が熱くて焦げてしまいそう。

「律……」

声も、熱いのには。

「……っあ、あの……」

でも、飯田はまだ手を出してはくれない。抱いてくれない。そういう素振りすらまだ、ない。

「んっ」

「……僕、掛け持ちしたくて」

仕事の話をしていなければ「どうして抱いてくれないんですか」と言ってしまうようで。無理矢理理性を保つための言葉を続ける。

「タママだけじゃなくて……」

でも手術をするのならそれだけでもいいだろうか。いやでも、陰囊にローターが入っているだけで人気が出るだろうか。ちよっとインパクトが弱いような気がする。

「ああ……藤永とはアナルジューサーが有力って話をしてたんだよね。あとは尿道責めか」

「はい……お尻で……ジューズ……」

「……っらいよ？」

「……はい。でも他に……その、手術しないのってあまりないですよね」

「うん……そうだね」

「あ、でも負担ですか」

「え？」

思い出したのは藤永の台詞だ。アナルジューサーは食事制限が厳しくて、管理が大変だと言っていた。

「その、食事……食べられないものとか多くなるって」

「ああ、そうだね。でもそれに合わせるくらいは全然大変じゃないよ。ただ食べられないものが多くて律がつらいんじゃないかなって思うけど」

「いえ……あの、迷惑じゃないなら……」

「分かった。じゃあ……頑張ろうね」

宜しくお願ひします、と頭を下げると抱きしめられた。嬉しい。

※ ※ ※

展示内容が決まった夜、飯田は二回、抱いてくれた。それから毎日飯田に抱かれ、少しずつアナルに入られる感覚を覚えてきて。そしてたくさんたくさん心も身体も愛されて、ついに迎えた手術の日。病室で医師を待つ時間はひどく長く感じた。

「緊張してる？」

「はい……」

小さな丸いローターを入れるだけなので、難しい手術ではないと聞いている。だから命に係わるようなものではないしと思うけれど、如何せん手術は初めてなので、その恐怖心があった。

(智樹はいつもこんな恐怖と戦ってたんだ……)

応援すると、自分が受けるのでは当然ながら全く感覚は違う。それは分かっていたはずなのに。

「……局所麻酔だけど、大丈夫。目を瞑って、俺のこと考えてて」

「麻斗さん……」

全身麻酔だったらよかったのに、と思ったけれど、局所麻酔で十分な手術だからと飯田は言った。医師がそう言うのならそうだし、飯田がそれでいいと思ったのならそれでいいのだ。でもやはり、怖い。きつと痛いし。

「手術終わったら一緒に寝ようね。もちろんずっと一緒にいるから」

確かに付き添いの人も一緒に寝られるような大きなベッドがある病室だった。それにゲイばかりが集まる病院だとも聞いている。だから一緒に寝ても、いちゃいちゃしても大丈夫だと聞いてとても安心できた。だって手術の夜に一人なんて怖いし、できれば手を握っていてほしいから。

「大丈夫。一緒に頑張ろうね。あ」

病室に響いたノックの音。飯田が応答するとドアが開いた。

「こんにちは。医師の大内です。宜しくお願い致します」

「こんにちは。担当看護師の狭山です」

「宜しく願います」

ベッドの横にあるまるで応接スペースのようなソファとテーブル。そこに向かい合って座り、医師の説明を聞く。

「今日は陰嚢に特殊ローターの設置手術ですね。時間は一時間程度の予定です。明日の朝には退院していただけますので」

「分かりました」

それから入院中の過ごし方や食事、アレルギーについての確認を終えて。

「……律くん、何か質問はあるかな」

「あ……」

大内と名乗った医師も、その横に座る看護師も優しい顔をしていた。安心できる顔。それに当然飯田はすごく大事にしてくれているし、不安はたくさんあったけれど任せてしまおう、と思える。

「大丈夫です」

大内医師が頷いた。けれどすぐに口を開く。

「そうだ、ごめんね忘れてた。飯田さんにはお伝えしてあったんだけど、今回入れるローターは左右に二つ。ワイヤレス給電システム搭載のローターなので、充電は専用のボードの上に陰囊を置いておくとか、近くに置いておけば大丈夫だから」

~~~~~

「そろそろうち出しておこうね」

「はい、お願いします」

手術から一か月。陰囊の痛みはなくなり、射精への恐怖もなくなってきた。

便の処理のため、寝室から繋がる『研修部屋』に入りズボンと下着を脱ぐ。この部屋には博物館と同じ腸内洗浄機と箱が用意されていた。でもまだ怖いので、箱は使わない。腸内洗浄機の前で飯田に向けて高くお尻を上げるだけだ。

「プラグを抜くよ」

「はい……んっ……」

術後に入れてもらった尿道カテーテルも、退院してすぐに入れてもらったアナルプラグも、ずっと入れっぱなしの生活を続けている。

そして作られた「うちの時間」。と言ってもいきんで自分で出すわけではない。ジューサーとしての洗浄に慣れるために、こうして一週間に一度プラグを抜いて腸内洗浄機を入れてもらって便を出させてもらうのだ。

「あ……あっ、苦しいっ……」

「うん……苦しいね。いいこ。ちゃんと苦しいって言えたね。でもまだお湯が入るよ。頑張ろうね」

「やああっ！」

排便が一週間に一度きりなのは、お腹の膨らみへの不快感に慣れるためだ。三日を過ぎるとかなりきつくなってくるけれど、これも全て仕事の——智樹のためだ。それに苦しい、つらいと言うことを教えてもらってから、飯田は前より一層甘くなった。

「ほら、おててぎゅってしてようね。うちつらいけど頑張ろうね」

「やあ……」

本当は手も握らない方がいい。実際の仕事では箱の中で一人で耐えなければならぬから。でも「まだ始めたばかりだから甘えていいんだよ」「甘えることも覚えようね」と言われ、継るように手を握って苦痛に耐える。

「いいこ……あ、お湯が止まるよ。苦しいね……」

「んっ……苦しいっ……」

お湯の注入が止まっても、そこから数分我慢しなければならない。博物館での洗浄ではすぐに吸水が始まるけれど、やはりこれも圧迫感や水分をお腹に含んでおくための練習なのだ。

「ああああっ……出るっうう」

「大丈夫、出ないよ。出せないから大丈夫。そろそろ苦しいときに身体から力を抜く練習をしてみようか」

「あ……」

(力を……抜く……?)

漏れないよと飯田は言うけれど本当に漏れないのだろうか——信じていないわけではないけれどつい怖くてアナルをきゅつと締め付けてしまう。

「ゆっくりお尻から力を抜いてごらん。漏らさないようにする練習は別にあるから、今は力を抜く練習だよ」

「ん……はい……」

飯田が優しく背中を撫でる。そのタイミングに合わせて呼吸を整え、恐る恐るアナルから力を抜く。

「あ……あ……出てないっ？」

漏れている感覚はない。でももう、抜げることに慣れたアナルは少し感覚が鈍くなっていた。

「うん、出てないよ。大丈夫」

「ん……」

ゆったりと力を抜いて、頬を床につける。でも当然お尻は高く上げたまま。

「すぐぐえつちな体勢してる。アナル気持ちいいね」

「んっ……」

お腹が苦しい。でも無理矢理上げられるアナルの縁は気持ちいい。最初は違和感がつらかったのに、いっしょに皺が伸びきった感覚がすぐく好きになってしまっていた。

「そろそろ吸水されるよ。そのまま力を抜いていようね」

「はい……あっ、ああっ！」

機械が腸内の水分と便を吸い取っていく。便が多いので吸引力も強い。アナルの中を吸われる感覚。無理矢理膨らまされていたお腹が小さくなっていく。

「ああああっ……」

「うん……気持ちいいね。うんち抜かれるの気持ちいいね」

「んっ……うんち気持ちいい……」

これからもう、少なくとも展示品として働いている限り自分の意思で排便することはない。排尿だってそうだ。基本はカテーテルを入れっぱなし。でも尿道責めの担当のときだけは抜いてもらって、それが終わったらまたカテーテルを入れてもらうことになる。

「あ……」

ぼわんとしていると、またゆっくりとお湯の注入が始まる。やっと楽になったのに、また苦しくなっていく。しかも二回目はさつきよりも注水量が増えるのだ。便が減った分、多く入れられる。

「苦しいね」

「んっ……苦しい……」

「可愛い……うんち抜かれながらおしっこも抜かれてる」

「え？ あっ……」

下を見ると、ペニスに挿されたままのカテーテルを黄色いものが通っていた。感覚のないまま処理される排泄。恥ずかしくて気持ちいい。

「うんち終わったら普尿パックを変えようね。もういっぱいになっちゃった」

「んっ……お願いします……」

恥ずかしいけれど、こうしてお願いができるようになったのも飯田のおかげだ。それをお願いをすると嬉しそうに笑ってくれるのも、褒めてくれるのも嬉しい。「可愛い……でもそろそろ敬語やめない？」

「え……？ あっ！」

ちゃんと話したいのに、腸内洗浄機は吸水を始めてしまった。大量の水と残った便が一気に吸われていく。

「あああっ……」

「可愛い……すごく可愛い。うんちのお世話されて気持ちいいね」

5万2千文字です。

後編に続きます。

後編はハードな内容（エロ）しかありません。